

小さき花幼稚園 教諭

私は4年前に一度、岩手県釜石市にてのボランティア活動に参加していた。したがって、今回園長先生からこのお話をいただいたときに、以前も行ったことがあるから...という思いで、正直なところあまり積極的な感情はわきませんでした。ただ、普段子どもたちと関わっていく中で、園長先生のボランティアのお話を子どもたちと身近に聞いてきました。また、「私たちも困っている人を助けられる、そんな園長先生のようなアンパンマンみたいな人になりましょう」と、常日頃から話している手前、「私は話をするだけで何もなくていいのか？」という思いもありました。そして、子どもたちは伝え聞いた話よりも、実際に教師が体験した話の方が圧倒的に喜ぶし、興味を持って聞き、心に響くと分かっていたので、「よし、それでは私が行ってみよう！」という気持ちになり今回のボランティアに参加した。

活動初日、「ありがとうおおつちロックフェスティバル」では、主に子どもブースに来てくれた子どもたちと、一緒に制作活動などをして楽しみました。子どもたちと関わる中で、私が感じたのは、岩手の子どもも山口の子どもも同じだということです。被災地だからとか、関わったことない知らない子どもだからとか、そんなことは関係ないのです。それはあくまでも大人目線で、「子どもは皆同じ」ということを思い出させてくれました。

活動2日目、生憎の天候で雨の中でバーベキュー。テントの下で焼く人と、センター内でそれをふるまい小学生のお世話をする人に分かれました。私はセンター内での活動でしたが、子どもたちがとても美味しそうに、喜んで食べている姿を見てとても嬉しく思いました。この子たちにとって夏の楽しい思い出の一コマになれば、と思いました。そして、やはりここでも「子どもは皆同じなのだ」と思いました。そこにいる子どもたちは、山口の子らと何ら変わりありませんでした。でも、この子たちの中には、震災によって消えることのない心の傷を負っている子がいることも確かです。その子たちのために「私たちができることは何だろう？」と考えさせられた一日でした。また、夜はベースで『遺体 明日への十日間』を鑑賞しました。人としての尊厳について考え、深い悲しみを抱えながら過酷な現実に向かう被災者の方々に、どうしていいかわからない感情があふれました。「私は今、何ができるの？」そんな思いが渦巻きました。

活動3日目。この日も生憎のお天気の中、視察に出かけました。実際に被災された方のお話は、私の心に深く刻まれました。「風化という言葉は皆よく使うけれど、それは被災してない人が言うこと。実際に体験した人にとっては絶対に風化なんかするはずはない。忘れられるわけがない。」という言葉は重く受け止めました。また、この日の午後は「風の電話」にも連れて行っていただきました。私は毎年3月に、必ずこの絵本を子どもたちに読み聞かせます。読むたびに、思いがあふれ涙します。どうしてもこの場所を訪れてみたかった。復興は進んでも、大切な人を失ったことで前に進めずにいる人はまだ多くいる。私も「風の電話」でささやかれるいくつもの心の声に耳を傾けました。

こうして、私の活動3日間は終わりました。命とは...、生きるとは...、寄り添うとは...、そして今私のできることとは...、様々なことを考えた大槌ボランティアでした。私が、見たこと、聞いたこと、感じたことを子どもたちに伝え、共に考えていきたいと思っています。そして自分でそこに行っても何かできる、そんな人に自分もなりたいし子どもたちをそんな人に育てられたらと願います。そして、一人でも多くの人にこのボランティア活動の体験をしてほしいと思う。行けない理由を探せばたくさんあります。でも、「行く」という選択をすることで必ず何かが変わると信じています。

小さき花幼稚園 教諭

2012年の夏に釜石市でボランティアに参加して以来、5年ぶりに被災地を訪れました。以前、車で通った道は、アスファルトが整備され、宅地が区画整理してあり、そこに新しい住宅がまばらに建っていました。まだ、何も建っていない更地が多く、少し寂しい印象でした。

震災から月日が流れ、生活する中で被災地のことについてメディアが取り上げることが減ってきている中、勤務する幼稚園の園長先生が度々、被災地の話を職員や子どもたちにお話をしてくださいました。

園長先生が言われていた「困っている人がいたら助ける」ということを実行してみる機会をいただき、今回ボランティアに参加することができました。

今回の活動内容は、1日目「おおつちロックフェスティバル」の子どもブース、2日目は子どもセンターに通っている子どもたちのバーベキューのお手伝いでした。あいにくの天候により、2日目の海遊びや3日目に予定されていた子どもの見守り活動は中止になりました。その他の時間は視察の時間をいただき、現地の方のお話を伺うことができました。

実際に現地に足を運ぶことでいろいろと感じるがありました。ひとつは、普通に生活をしているように見えても、急に何もかも失われた人々がいて、特に家族や友人、親しかった人お世話になった人が突然亡くなってしまった悲しみを抱えた人々がいること、助けてあげたかったと悔やむ人があるということ。その土地の人々と関わることで、縁のない知らない人ではなくなりました。自分とは関係のないことではなくなりました。自分の場所に帰っても、心の中で思い出し、祈っていかうと思いました。

そして、災害が起こった時にまずは自分で自分の命を守ること、そのためには避難ができる動ける体、知識、知恵が必要だと感じました。そして、助け合うこと。そのためには、周囲の人とコミュニケーションをとっておくことが必要だと思いました。

また、自分の周りにはたくさんの物があり、着たい服を着て、欲しいものを買っています。すべてを失った時に残るものが自分自身なら、内面を強くたくましく美しく生きていきたいと思いました。

視察の中で、「風の電話」にも行かせていただきました。大きな悲しみを抱えた人たちの思いが、亡くなった方々の思いがそこにある気がして、正直行くのが少し怖かったです。けれどもそこは、癒しの場でした。人を愛する心にあふれていました。誰もが最後に“ありがとう”とか“大好き”と伝えて亡くなることができれば幸せなのに、と思いました。

ガイドの方のお話で、盛土をして湧き水が出なくなったことや、区画整理されここからは家を建てられない、というお話もありました。震災前とは街並みが変わりつつあります。でも永遠に変わらないのは、その地で人々が生活していたということ。そして、亡くなった人、生きている人も家族や周りの人々を愛し、そして生まれ育った故郷を愛しているということ。希望は被災地の皆さんの心の中にあって、私たちはその芽が育っていくようなお手伝いをしていくことが大切だと思えました。

幼稚園では震災後に生まれた子どもが通って来ています。震災の出来事を伝え、悲しい苦しい思いを抱えた人々のために子どもたちと一緒に祈りしていきたいです。そして、困っている人がいたら助けるという心を育んでいきたいです。

自分に生まれたことに誇りを持って、感謝の心を持って、自分の置かれた場所で自分を喜んで使いながら毎日を過ごしていきたいです。

徳山教会 神父

2011年の12月に始まって山口ブロックのボランティアは福島を含めると今回が18回目になります。初回は、津波が2階天井まで襲って旧ビジネスホテル寿でした。壊滅的な被害を受けた大槌の中心部のその場で寝泊まりするだけでも津波のすごさを体験しました。その後、ボランティア・ベースは2回移転しました。本当にたくさんの思い出が大槌町にあります。

初代ベース長の古木神父さんは、「ボランティアは受け身ではなく、準備をして来てください」と言われました。何が喜ばれるのか想像して準備するところからボランティアが始まっていました。今回のメインは“ありがとうおおつちロックフェスティバル”というイベントの子どもブースの担当でした。後から知ったのですが、大槌町にはジャズミュージシャンの坂田明さんが、何度も応援コンサートを開くなど、ジャズに親しみ、ジャズから元気をもらっていた町でした。私は、イベントのために、子供たちが喜びそうなものを手配したり、恐竜の着ぐるみを用意しました。ボランティアグループの皆さんは、準備されたものを上手に使い積極的に行動されていました。活動初日、お子さんの来場もたくさんあり「お手伝いできてよかった」と思っていました。後日の、主催者の反省会では、先生たちが用意した凧が特に役立ったことを知りました。駐車場整備の人は、イベントの様子をじかに見れません。ロックの曲が流れ、凧が上がっている。「今年も開催できた。たくさんの方が来てくれた」と喜びと感謝の涙を流されたそうです。何がどのように喜ばれるか現地に行かないとわかりませんが、今回も出来る限りの準備をして良かった、と感じました。故古木神父さんも喜ばれたと思います。

活動2日目の「山田町で海あそび&バーベキュー」は天候不良で、バーベキューだけの開催となりました。山口の猛暑からして、大槌でも暑いだろうと予測していましたが、肌寒く、海水温も低くて水には入れない事態になりました。それでも、バーベキューだけでも実施できて良かったです。200個用意したおにぎりも食べ尽くし、おなかいっぱい食べてもらえたことは、夏の楽しい思い出になったことでしょう。

その他に予定していた活動は、雨で中止になってしまいました。それだけでなく台風による豪雨で、避難勧告まで出てしまいました。夜、何度か、小槌川の水位を確認に行きました。今回は、水位がさほど上昇はしませんでした。警報が出ると不安になります。また、2011年に津波が襲った時にも、どの程度のものか確かめたくて、見に行ったら津波にのまれてしまった方もおられたに違いありません。自然災害への不安・備えの難しさをも感じました。

今回も、ボランティアの活動以外に、瀬川さんとも相談して現地の視察を組み入れました。山口から大槌までは1600キロあります。なかなか来ることができませんし、せっかく来たのだから、できるだけ現地のことを知ってもらいたいと計画しました。ガイドの赤崎さんは「風化、と言われるけど、自分たちには風化はない。昨日のここのように感じて」と言われました。年に3回、東北に来てはいますが、それでも風化している自分を感じました。映画『遺体 明日への10日間』は、釜石市での遺体安置所で起きたことを描いています。津波直後の様子を想像してもらうためにいつも鑑賞してもらっています。映画の最後に、娘さんのご遺体に一晩お母さんが付き添う場面があります。家族を失うつらさ、特に我が子を失うつらさ、家族が注ぐ愛情、そして被災した方が、亡くなった人たちを出来る限り弔う姿に、教えられることがたくさんあります。大久保さんの体験談は、別にまとめました。参加者それぞれに心に残るものがあつたと思います。

ボランティア、視察に加え、一緒に寝泊まりし、食事できるのもグループ活動ならではの体験です。特に、幼稚園の先生方とは分かりあえる部分が増えて、職場でもプラスに働きます。貴重な夏休みを割いて参加くださり本当にありがとうございます。先生たちは、大槌の様子を園児さんに

話してくれるでしょう。「困っているおともだちへの優しい心。かけがえのない命の大切さ。何気ない毎日のありがたさ。」・・・その様子を見て「今回も実施してよかった。」と改めて思うでしょう。

大槌では、仮設住宅が2019年3月で閉鎖(一部集約)されること。町内の復興住宅の家賃が高く最終的には生活保護を受け陸前高田市に移動する人も出てくる予測を聞きました。津波の被害を受けた地域の中でも、復興が遅れ厳しい状態にあることを知りました。

これまでお世話になった大槌ベースが来年3月末で、閉鎖が決まりました。数々の思い出が大槌に残されています。グループでの活動は最後になりますが、また、機会を作って伺いたいです。大槌ベースの皆さん、本当にこれまでありがとうございました。

大久保正人(和太鼓演奏者)さんの話 2017年8月9日 カリタス・ジャパン・大槌ベースにて(過去に話された内容も含まれています)

震災前のお仕事

震災の時、自宅は、旧大槌町役場の近く。不動産業(賃貸)の会社の手伝い(父)をしていた。震災の後、戻れない地区に指定された。現在の収入の半分は音楽活動で半分はバイト。不動産の会社は廃業しました。本当は元の土地に戻りたかったけど事情が許さなくなった。

地震前の話

父は、盛岡医大に1ヶ月入院していた。震災の1週前に退院したいと電話があった。「でも、ちょっと早いんでないの？」母は、早く死んでいた。3月10日に盛岡に迎えに行った。まだ寒い時期だったので「地元の病院で体慣らしたら・・・」ということで即入院することになった。その日は、歯医者予約が3時にあって、送り迎え頼まれた。

地震時の話

歯医者に2時半に行き、大町の自宅に連れに行った。そこに地震がドーンときた。一週間前にも地震があった・・・今回は、どんどんひどくなる。1~2分終わらない。

避難中の話

避難するのが地震あってから20分も経っていた。何持っていくか？ 財布程度・・・ とっさになると気づかない。ジャズ喫茶の人と逃げた。

「人生はわからないな」と後になって思った。遅く出た故に助かった。もっと早く逃げたのに助からなかった人も・・・自分は最後尾で逃げた。逃げようとしたら車が渋滞していた。だから方向転換できた。たまたま、お寺さん(被災した)を通過して逃げることができた。お寺さんで乗っていた人たちをおろした。その後、自宅に戻ろうとした。すると、向こうに見えた家がふわっと上がった。その後、ドーン。浮かび上がってドーン。土煙が上がる。急いで引き返した。バックミラー越し、背後に津波を感じながら走ったのは2~3分。ギリギリの状態。背筋がぞおっとした。生と死を分けたのは、ほんの紙一重の差。あの時、車で走って今も命がある。一生忘れない。そういうことは普通ではない。

避難先での話

城山体育館に避難した。最低600人はいた。津波は引いてはまた来る。崩された家が、引き波で持っていかれる。みんな右往左往していた。その晩は、津波で被害を受けているのに、みんな異様な静けさだった。宙に浮いているような感覚。「家族を捜したい、家を見に行きたい」と思っても町は火の海。津波の後、プロパンガスのボンベが爆発しそのうちに火の手が上がった。大槌は津波プラス火災の被害にあった。

体育館は、寒かった。外は雪・・・ブルーシートがあった。みんな被った。その時は暖かく感じた。火事は次の日も燃え続けた。その晩は、ブルーシートにくるまってフローアの上に横になった。避難した中央公民館にも徐々に煙が立ちこめ始めた。近くの木々が燃えだした。でも何も震災に関する情報がない。火災はひどくなる一方だった。(火葬場のご遺体を燃やす温度が1200度と言われるがその時の火の温度は1600度に及び、しかも5日間も燃え続けたので遺骨が見つからなくなってしまった。)「ここもダメ。早く逃げよう。」三日目になって、もっと高い場所の城山公園に移動した。

1週間後に被災証明が下りた。私が身を寄せたのは、避難所は三箇所。今、大槌病院が建っているところにも。そのあと友人宅、そこに2ヶ月いた。

ご遺体のお話

中学校の体育館が遺体安置所になった。自分の父親を、一体一体確認するしかない。ブルーシートをめくりながら顔を見て「ちがう、ちがう・・・」時々、知ってる人が出てきてショックを受ける・・・。最初の頃のご遺体はきれいだった。でも、日数が経つうちに・・・泥を飲んで亡くなられている方・・・遺体は部分的にしか見つからない。日を追うごとに凄まじさが増していった。探している遺族に引き渡せるように防腐剤をご遺体に打っていた。でも、夏が近づくと腐敗が激しくなるのでDNA、歯並びなどのデータを取ってすぐに火葬した。時計、服装、体のどの部位が見つかったか写真や文章にして閲覧できるようにまとめていた。一つの墓石に、家族が次々と家族が納められる・・・。皆さん、大概そう言う体験をしている。

亡くなられたお父さんのお話

父親が見つからない。避難所のホワイトボードに家族の居場所調べる。歯医者さんに会えた。「ダメだったんじゃないか？ どこかにいるんじゃないか？」6月にDNA鑑定をしていた。9月になって、父が亡くなっていることがDNAのデータでわかった。それでも、実感が湧かない。自分の魂がどこかへ言ってしまったかのよう。冷静だった。

音楽の話

一週間して、被災した実家に行った。一階は鉄筋コンクリートだったので、いくらか残っていた。和太鼓とシンセサイザーを見つけた。泥につかった太鼓は、カビやシミができて使い物にならないだろうけど、持ってきた1輪車で持ち帰った。太鼓を運んでいるので珍しく思われ、途中何度も質問にあった。警察、報道、地元の人・・・だんだん答えるのが面倒になってきた。真水で洗うとうまく泥が取れたが、油臭い。きっと、油が牛皮を保護してくれたんだろう。ピカピカに戻って音もそのまま。”奇跡の太鼓”と呼ばれ、全国紙にも載った。尺八とギターが流されたこと・・・自分の住所も掲載された。すると、下関に住んでいる94歳のおばあちゃんから「形見の尺八を使って欲しいので送りたい」という申し出があった。でも、仮の郵便局で手紙は止まっていた。個々の避難先には配達してくれず、自分で郵便物を取りに行かなければならなかったのが、気付くのが遅れた。

その方は、何通も手紙を送ってくれていた。「お父様の形見は、申し訳ないので使うわけにはいかない。お気持ちだけでうれしい。」と返事をしたが「いや、だめだ。ぜひ使って欲しい」と強いて送ってくれた。

でも、自分には音楽をする気はなかった。すべて流されて無くなって、残っているのはその日に着ていた服だけ……。『明日からどう生きるか？』 音楽をする余裕はなかった。でも、ギターが送られてきたり、目の前に楽器が揃っていく。「もしかして、音楽をやってみたら、と言われてるんじゃないか？」と感じ始めた。震災のショックのリバウンドで、無性に音を出したくもなってきた。宮古、釜石でコンサートをしたり、演奏の機会が増えた。「一緒にやろう！」と中央公民館でのコンサートにも誘われた。500人の聴衆の前で、郷土芸能とカップリングでコンサートをした。そこは、いつもは、物音しない、どんよりとした雰囲気のところだった。みんな、たたみ2畳のスペースで生活している。慰問のコンサートと言っても、プライベートの空間に土足で上がるような感覚で遠慮があった。どうにか終わった。知ってる人もいる。あいつ（私のこと）も被災者と知ってる人もいる。

すると、ある人がステージに上がって来られた。マイクをぶんどって話し始めた。「こういう、元気なすばらしい演奏してくれたのに、みんなこれではダメだ！ 辛いけど元気だそう」その話、拍手が起きた。拍手の輪はだんだん大きくなった。「音楽をするってこういうことなんだ！ やってよかったんだ！」と、演奏したこちらが感動した。

ある日、遠くから挨拶された。「この前（コンサート）はありがとうございました。」「いやいや、お手をあげてください。」音楽をしてこれだけ感謝されたことなかった。

別の山奥にある避難所では、参加者は10名くらいのところもあった。椅子もないので丸太に腰掛けて聴いてくれた。地べたに座っていることもあった。たった、一曲だけ演奏することもあった。そこである女性が目を赤くして深々とお辞儀された。自分が表現したことが形を変えて伝わっている確信を得た。音楽という媒体を通して伝わる。震災がなかったら体験することはなかっただろう。・・・なかったら中途半端な音楽しかしてなかった。

ハードの復興ばかりに力を入れるが、人との関わりがいかに大事か？ 学んだ。

震災を経て感じること

・自然への畏敬の念

震災で自然の脅威を感じた。自然の力は、我々が考えるようなものではない。持っているエネルギーがどんなものか見せつけられた。人間は到底太刀打ちできない。宇宙の力とはんでもない。『遠野物語』にも「いざことが起きたら大変だぞ！」とあるが、自然への畏敬の念を持つことが大事。それなのに、自然の力に疎くなっていた、忘れていた。

人間はやりすぎた。原発事故にしても・・・自然への敬の念がなかった。宇宙の力の凄さ。

人間がとてもじゃないが手足が出せない。目撃した者はしっかり考えないと・・・

・シンプルな生活の大切さ

生活をコンパクトにしてもいい、楽しく暮らせる方法はある。きれいな川・海・山。そこから何かが出てくる。国が決めた物理的な復興ではなく、メンタルな部分が大事なのだと思う。私は震災で人生観も変わった。国の提案に飛びつく市町村もあるが・・・貧しくても楽しいことを見つけられ

と思う。最近、畑を始めた。育てることは楽しい。土を触る快感、植物の成長に感動する。小さくても、モノはなくても、不便でも結構。そう言う人が増えているのでは？ 少数でもこつこつ。生産性、効率追求は限界がきている。それを追いかけて続けるのはまともじゃない。成長の意味を問うべき。大きなものはリスクが伴う。原発がそう。お金やモノがあればいいのか？ 三陸鉄道は、もともと赤字路線だった。復旧も上が決める。本当に必要なのか？ 反発したらいいのに・・・「言っても無駄？」 東北人はシャイ。口を開くのに時間がかかる。一見、辛抱強い・・・美德とも言えるが・・・住んで楽しい町、心の成長を遂げることを目指すべき。震災で目覚めた。生活を見直すことを考え始めた。人間は、自然を所有できるはずがない。この基本を忘れていた。絶対安全はない。大槌にもチャンスはある。大変でもチャンスはある。

大槌町の復興のお話

大槌は、住んでいる地域の3分の2が津波危険地帯。盛岡・花巻・釜石・北上は3分の1。離れた人たちは戻って来ない可能性が高い。町はどうなるのか？ 出て行った人たちは別のところで再建している。「戻る」と言ってもイメージがわからない。不安を抱えながら淡々と時間が過ぎる。日に日にメンタルな重圧がかかる。

ある仮設住宅は、はじめ100世帯だったが60世帯に減った。「町をどうするか？ 再開発のモデルは作られるがその通りに人が戻るのか？」 大槌は人口減の比率が高い。女川町、南三陸町は犠牲者が多かったが人が住んでいる面積全体からすると大槌より被害の比率が低い。大槌は、面積に対して死亡率が高い。その分、復興のスピードが遅い。元々の少子高齢化の問題もあった。子ども連れの若い夫婦は、学校・教育・雇用の状況で見切りを付けて出て行っている人が多い。「働く場がないので人口はどうなるのか？」 住民票の数は当てにならない。恐らく1万人を切っている。震災前は1.5万人いたが、今は7千5百人かもしれない。

年配の人は、先が見えてるので「どうせ死ぬならふるさとに帰りたい。」と思っている人の割合が高い。旧大槌町役場(約40名の犠牲者が出ている)は、新しい町長の決断で取り壊すことになった。

14.5メートルの防波堤を計画しているが、まるで留置場の壁のよう。「町の中心部を2~3メートル盛り土する」とトップダウンで決まった。復興庁(国)→県→町、と計画の調整がなされているように見せかけているがはじめから計画は決まっていた。赤浜だけは5~6メートル盛り土される。なぜかはわからない。

震災後、震災後6年は違う問題が出ている。大槌は、被災地の中でも突出して厳しい状況になる。人口構成が明らかになっていないので、税収がどれだけ見込めるかが、出てこない。第2の夕張市になりかねない。街として成り立っていくのか不安。行政の側に問題がある。街が成り立つための議論がなかった。それを町人とするべきで、今まで不在だった。被災はある面、一つのきっかけになるのでは？ 人の輪を作ると見えてくる部分がある。

6年は、個人にとって、あっという間だった。やっとここまで・・・まだまだこれから・・・阪神淡路10年 大槌は、その倍はかかる。

被災の規模と復興の遅れは、大槌と陸前高田はワースト。まだまだ・・・白紙状態・・・山田町は早い方、釜石も。大槌は、とにかく、遅い。人が住んで楽しい街を目指したほうがいいが・・・

町長も先が見えない。きらり商店街もあと数ヶ月。震災特需もあと1年で終わり。2020年の東京オリンピックで人手が足りなくなる。土木が基幹産業になっていたが、それも終わる。復興予算がなくなったら仕事がなくなり収入が途絶える。

生活感が変わる

私は、被災して人生観がガラッと変わった。モノがあったらいい時代は終わったと思った。必要以上にモノは入らない。人口も少なくてもいいと思う。前の人口に戻らなくてもいい。時代の方向性を見直すべき。どうしても、お金に目が向く・被災地もどうしてもそちらに行く・でも・・・幸せ感覚を見直していいんじゃないか？ その方が面白いんじゃないか？
震災前はそんな話はしなかった。今は、思いを語る人がいる。「どうやって？」これから取り組む。

変な言い方ですが、津波で震災を嫌いになった人（今でも精神的に不安定で理解できない人）と一方で、震災を好きになった（受け入れる人）がいる。

津波を体験して、より人生を考えるようになった。たった、あの一瞬で全てなくなる。命だけある。

「明日からどう生きよう？」「幸せに生きるって？ どういうこと？」と考える。

死んだ人の分まで・・・自分の心に問う。一方で、掴めてなくて葛藤している人も。

それは大きなテーマ。自分のライフスタイルどうしようか？

人間として感ずべきこと。被災によってより深く、他の地域の人より考えるようになった。

それは、津波がくれたプレゼント。津波で、ぶん殴られて・・・痛い・・・でもプレゼント

「自分とは何か？」そこまで厳しく考えたい。

「明日からどうやって生きるか？」 極限になると「みんなで協力しよう！」だんだんモノが揃っていくと付き合い方が変わってしまう。

萩光塩学院教諭

今回、3度目の大槌町でのボランティアに参加して、また新たにいろんなことに気付かされ、多くのことを学びました。震災から6年が過ぎ、過去2度の訪問のときに比べると町の様子はかなり変わってきていると感じました。土地がかさ上げされ、新しい道路が整備され、住宅や商店も多く見られるようになりました。立派な共同復興住宅もできていました。町の様子からすると着実に復興していることが分かります。しかしながら、そこに住む人々の「心の復興」は決して一様ではないことも知ることができました。たとえば、おなじ仮設住宅の住人でも、新しく住む家の目途がある人とそうでない人に対する行政の対応の違いが人々に不満を抱かせていることなどです。

私たちは今回、「おおつち ありがとう ロックフェスティバル」というイベントに参加し、子供ブースを担当しました。子供たちが楽しめそうな遊び、工作などをいくつも準備しました。そのおかげで、たくさんの子供たちの笑顔を見ることができ本当に良かったと思います。人とのかかわりの素晴らしさを感じることができました。以前、震災ボランティアに参加した若者が、次のように話していました。「自分は、ボランティアを通して、多くの人とのかかわりができました。そして、ここに来て何よりうれしかったのは、今の自分を必要としてくれる人がいることです。」私も、今回、この若者とまったく同じ気持ちになることができ感謝しています。知らない人とかかわりを持つことで、人は他人への思いやり、優しさを身につけることができ、さらに自分自身をも見つめなおすことができるのではないのでしょうか。そして何より、自分が誰かに必要とされていることに

気づき、しあわせな気持ちになれるのではないのでしょうか。

また、今回は「おおつち教育未来会議に向けた懇談会」にも参加させていただきました。高校生からお年寄りまでおおつちの将来に関心のある人々が集まり、それぞれが熱い思いを語り合っていました。私もその輪に入り、大槌の人々とかかわりを持つことができたことは大変貴重な経験だったと思います。

最後に、一番印象に残っていることについて書きます。それは、夜、大槌ベースに来て下さった大久保正人さん話です。大久保さんの震災当日の胸のつまるような話と現在の心境についての話です。大久保さんは1秒、間違えば津波によって命をおとしていた自分を振り返り、生き残った者と亡くなった者とのちがい、そして今、生きている意味について語られました。

「私は、生き残った者として、生きている意味について、考えるようになった。人間は、いかに生きるか。どのような生き方をすべきか。震災は、ある意味、わたしたちにプレゼントをくれたと思っています。」

震災を受けていない、わたしたちにも深く考えさせられる言葉でした。

萩光塩学院高等学校3年 女子

私はこのボランティアに団体で参加するのは最初で最後になるでしょう。

今回、初参加だった私にとって大きかったことがあります。それは現状を見られたことです。私が動画やテレビで見たものは、瓦礫や破壊されたもろもろのものが山積みになった光景ばかりでした。しかし、今はだいぶ復興作業もされ、たくさんの仮設住宅が建ち、店もできていました。それらを見たときに私は少し安堵しました。と同時に「まだまだこれからだ。1日も早く元に戻るように寄り添い、自分たちもできることをしていきたい。」と感じました。

また、台風の影響で予定していたボランティアができない日もありましたが、ボランティアできた日に子どもたちと触れ合える機会がありました。一緒に遊んだり、話したりしていると、どの子どもたちもとびきりのSmileで私の方を向いてくれました。そのことが本当に嬉しかったです。この笑顔、この子どもたちを守りたいと思いました。

ボランティア3日目の夜に見た映画は特に印象に残っています。衝撃的で、残酷で、誰のせいでもない自然の力というものを見せ付けられた感じで言葉が出なかった。ただただ涙だけが止め処なく出てくるだけでした。また、私の中で様々な感情が混乱しているとき、冷静さもありました。その冷静さの中に、「人と人の繋がりやはり大事なのだ。」という強い思いがありました。また、これからの人生後悔しないように生きていきたいと心の中で決意しました。

現地を訪れることができ本当に有難かったです。この度の体験を自分の中でだけで受け止めるのではなく、家族や学校、知らない人たちにこのことを伝えようと思いました。大槌ベースは今年度いっぱいできなくなってしまいますが、今度は個人で行きボランティアしたいと思っています。

萩光塩学院高等学校1年 女子

私はこのボランティアに参加して、初めて東北の被災地を自分の目で見たり聞いたりすることができました。これまでメディアだけの情報でしたが、現地で初めて知って驚くことばかりでした。特に2日目の夜に見た『遺体明日への十日間』という映画と、4日目の語り部さんの説明と被災地

の視察が私の中ではとても衝撃的でした。映画は震災直後の遺体安置所のできごとを描いたお話でした。その中で見た、遺体で見つかった中学2年生の女の子と生き残ったお母さんのシーンは私の心にとっても響きました。そのお母さんはずっと子供の近くから離れず、ずっと泣いてばかりでした。いきなりやって来る自然災害によっていきなり家族とバラバラになることがどれだけ辛いことなのか改めて考えることができました。自分も家族を大切にしていかなければ、と思いました。被災地の視察では、被害にあったまま残っている役場がとても心に残っています。そこでは40人の方々が犠牲になったと聞きました。そこにあった時計の針は津波が来た頃で折れていて時間が止まっていました。そこでも津波の悲惨さを感じることができました。その周辺の地域の家はすべて新築や建築中のものばかりでした。正直それを見たときは唖然としました。私は被災地に行くまではあんなに広範囲に、あんなに高いところまで津波が来たとは思っていませんでした。現地に行って実際に見てみるまでわからなかったと思います。今回の体験と感じたことをしっかり考えていこうと思いました。

4日間活動して、たくさんの人とかかわることができました。その中で私は初対面の人とあまり話すことができませんでした。ベースの中で出会った人やボランティア先の子供やお年寄りに自分から積極的に話していくことができませんでした。それから、いきなりみんなの前で話すことが苦手なんだな、と気づきました。逆に相手の方から話しかけてくれるとたくさん話すことができました。今回の活動で、自分の良いところ悪いところを見つけることができました。これから自分の悪いところは改善できるようにし、良いところは伸ばしていけるようにしていこうと思います。知らない人とたくさん知り合えて、自分の世界が広がったなと思いました。

東北へ行く前まで正直「6年も経っているのにそんなボランティアすることあるのかな」と思っていました。しかし、自分が想像していたより大変で、やることはたくさんありました。また、充実した日々を過ごすこともできました。私自身ボランティアをしたのは初めてだったので、人の役に立つ良さをわかることができました。この経験を活かし、自分の悪いところを改善してこれからのボランティア活動につなげようと思います。

4日間で、一生大切にしていけないといけないものを得ることができました。とても良い経験をすることができました。

萩光塩学院高等学校 1年 男子

私はボランティアに行く前、現在の被災地がどんな状況なのかを全く知りませんでした。イメージではまだ瓦礫が残っているのかと思っていました。しかし、実際に行くとイメージとは全く違い、瓦礫も殆どありませんでした。又、瓦礫どころか新築の家が何軒も建っていました。そこから、代々からの地元を愛する気持ちが伝わって来ました。震災から6年も経ったからか、地元の人々は結構、気軽に話して下さいました。しかし、その心の奥にはあの頃の恐怖やトラウマがあるんだろうなと思います。

私達の主な活動内容はイベントの手伝いでした。台風で避難警報が出たりして、活動が幾つか減ってしまいました。限られた活動の中で、自分の出来る全てが出し切れたかどうかと言われると、まだまだでした。しかし、いくつか出来た事があります。子どもと遊ぶ時は、子どもが興味を持った物と一緒に遊んであげたり、数少ない知識でバルーンアートを作ってあげたりした事です。それでも、まだまだやり残した事が山程あるので、又、もし機会があればまた参加したいです。

山口、防府教会 信徒

2011年3月11日14時46分頃東北地方を襲った地震、津波は甚大な被害を東北各地にもたらしました。6年を経過した本年8月5日から10日までの間、2017「夏季東北被災地ボランティア・大槌」に参加でき、現在に至る災害復興に色々と考えさせられる実情が垣間見られました。

8月6日(日) 「おおつちありがとうロックフェスティバル」での子供ブースを担当し、子供たちのお相手をしました。水鉄砲やシャボン玉等で遊び、子供たちと一緒に無邪気になりお相手できました。6年前の被災地報道映像から想像していた現地の子供たちの表情は予想以上に明るく、前向きに、未来を見据えた子供の成長を見ることが出来ました。私もその強さに勇気づけられた感じでした。

8月7日(月) 「山田町で海あそび&バーベキュー」は雨天中止となり、大槌町内の学習会館でバーベキュー昼食会を決行。ここでも、200個も用意した「おにぎり」が一瞬でなくなる子供たちの食欲にビックリ。子供たちは震災の後遺症もなく元気に育っているのだなと感じました。

8月9日(水) 「県営屋敷前住宅にてお茶っこサロン」では、高齢者の方たち30名位をお相手に稲葉さんのミニ音楽ライブを実施。私はお茶とお菓子をお配りするお手伝いをしましたが、ご高齢者と会話する機会もあり、津波の怖さが言葉、表情から伝わってきました。「津波」と発せられた言葉の次の言葉が途切れ、暗い表情は私の心に強く残りました。今まだ、心の傷は癒されていない、そして見えない「希望」がそこにあるよう感じられました。

滞在期間中、大半が雨に見舞われ、予定していたスケジュールが変更等で消化できませんでした。現地の方々は今現状、落ち着きつつあるようです。しかし、平成30年3月末の仮設住宅退去、大槌町営住宅の高額家賃問題等々での不安があり、これからも多くの難題を抱え、それらに立ち向かわなければなりません。

私は、2017「夏季東北被災地ボランティア・大槌」に参加し、脳裏に浮かぶのは、震災から6年の歳月を経ても、今なお不安な思いを持ちながらも必死で明るく生きる人々の姿です。身近で起こる諸災害での被災地におけるボランティア活動に積極的に参加しようと思います。

防府教会 信徒

この夏、3年ぶりに2回目の「東北ボランティア・大槌」に参加させていただきました。

活動の初日と二日目はフェスティバルの子どもブースの担当やバーベキューなど子どもたちと直接触れ合うものでした。三日目は、台風の影響で予定されていた子どもたちの活動が中止になり、町内視察が主な活動となりました。私たちは震災時の津波の様子や今までとこれからの町づくりなどの解説を聞きました。また、町立の小中一貫校となる大槌学園の新校舎、淡水魚イトヨの源水川、江岸寺、旧役場、蓬莱島(ひょうたん島)、中央公民館などを視察し、旧役場では祈りを捧げました。

その夜には台風の接近で釜石市と大槌町に土砂災害警戒情報「避難準備」が発令され、その後、避難勧告に変わりました。私たちも避難所の確認をして、いつでも避難できるような服装で休むことにし、不安な一夜を過ごそうとしていました。そんな中、ある参加者の「避難所に行ってもボランティアできますね」の一言で本来の目的を再確認できました。いつも置かれた場所・状況で自分

を活かすことができるように心がけることを教わったような気がします。また、そうすることが奉仕につながるということを実感しました。

台風は大きな被害を出すことはなく、四日目を迎えました。この日の主な活動は「県営住宅にてお茶っこサロン」です。なんとメインのイベントは私の演奏会! お集まりのみなさんと一緒に歌えるプログラムを用意して臨み、大変喜んでいただきました。

前回足を運んだ時には、盛り土された道路に、土砂を運ぶダンプが行き交うだけだった町がこの三年間で盛り土の上に区画整理され、様変わりしていました。町の教育シンポジウムにも参加させていただき、町をリードしようとしている若い方々の情熱もひしひしと伝わって来ました。これからは個人の生活再建や人口減少に伴う町の財政問題など深刻な問題が山積みである事を見聞きました。大槌ベースが閉鎖された後も、コミュニティーを機能させていくための支援が必要です。個人でどのように支援できるか考える機会をいただきました。ぜひそれを実現させたいと思います。神に感謝!

山口教会 信徒

この夏の大槌は、期間中今までになく雨に見舞われ、注意報、警報、避難準備まで出されました。帰る前日まで釜石線の一部区間が運休するというハプニングがまで起こり、はじめての体験をしました。

ベースの前を流れる小槌川の水位を何度も見に行きましたが、幸いにも大事には至りませんでした。そんな中、この度計画されたプログラムの中で、山田町の子ども達との交流の海水浴が、海水温度が低く中止になりました。BBQ も雨の為、焼く場所は外のテントで、食事はホールの中、と変則的な形となりはしましたが、実施は出来ました。又、6年続いている「ありがとうおおつちロックフェスティバル」に今回初めて子供ブースの応援で参加しました。何とか雨に降られず、予想以上の反響を頂いて終える事が出来ました。このコーナーは「子供たちからも、親からもたいへん喜ばれ、主催者からも感謝の言葉を頂いた」と後で聞き、本当に役に立てたと実感し、皆様の活躍に感謝しています。

今回初めて大槌を訪れる若いメンバーも多かったです。町内視察では、災害の爪痕、特に旧役場跡、城山公園下のお寺跡、城山からの見た新旧の違いを体験できました。また、映画『遺体明日への10日間』を観て、語り部の大久保さんからの話を聴くことができました。これから先、機会を見つけて、この地を訪れて名称を思い出して欲しいです。

私も平成24年夏から今回まで延べ7回訪れ、カメラやビデオのファインダーを通して大槌町の復興の様子を見聞きしてきました。特に城山公園から町を見下ろす度に、出来るだけ同じ位置から写真を撮り続けました。撮り比べると、元の地盤から盛り土をし、整地をし、区画し、電柱を立て、舗装し、道路のラインが入ると1つの街区が見えてきます。4M嵩上げをされた上に出来た新しい道路を、車は何事も無かった様に走っています。この下には沢山の人々の生活が、あの日が来るまで整然と営まれていました。城山公園からの眺めからでは、津波当日迄の美しかった大槌の街並みがどうしても結びつきません。あった町が津波で全て持ち去られ、その爪痕を見るだけでは、以前の様子は中々想像できません。外から来た私は、過去を知らないで、余計に昔が結びつきません。

街は目に見える部分では、その復興ぶりを今年は特に感じました。工場、店舗、事務所等々新しい建物が目立ちました。昨年まであれだけ走っていた多くのダンプが、殆ど姿を消していました。1歩奥に入ると、まだ多くの仮設住宅がひっそりと残っています。周辺には高層の市営・県営の住宅が次々と建ち、入居者を待っています。震災から6年も経過すると、(仮設は元々3年をめどに

建てられ部材も廉価なものが多いと聞きます) 色んな部分に不具合が生じています。特に東北の寒さに十分対応できていません。大槌町は、仮設住宅を集約して、新しい復興住宅に入るように勧めています。今度は高い家賃の問題が生じています。支払える人はいいいですが、特に高齢の方は収入が少なく、生活保護を受ける方も現れそうです。

これから町が発展していくために、どの様な手を打つべきか? 若い働き手を如何に町に引き留めておくか? 新しい町の形がだんだん見えて来ると、これからいろいろな問題が出てくるのでしよう。

私たち夫婦は、これまで3年間、山口から半日12時間をかけてこの大槌ボランティアに参加してきました。町内各所の仮設住宅、施設、個人宅を訪問し、様々な方と交流を深めてきました。又、個人的に漁師の佐々木さん、語り部・尺八奏者の大久保さん、写真家の伊藤さん、切り絵作家の澤口さん等多くの方とお知り合いになることが出来ました。又、大槌ベースの皆さん大変お世話になりました。

来年の春をもって閉鎖となる大槌ベースでの最後のグループボランティアという事で、ベース側の配慮で目一杯受け入れて頂きました。片岡ベース長、生利さん、西舘さんに御礼申し上げます。

個人参加になっても、大槌の事を忘れず機会を見て訪問したいと思います。今迄、参加してくれたボランティアの皆さん、ベーススタッフの皆さん、本当にありがとうございました!!

山口教会 信徒

今回、心に残った事2つあります。1つは「ありがとうおおつちロックフェスティバル」のイベント会場で子ども達のブースを受け持ったことです。その際には、仮設トイレ8基の清掃、点検(ペーパーの補充、手洗い水の補給)そして、会場内の生ゴミ、ペットボトルの、缶等の改修を担当しました。柴田神父さんと幼稚園の先生方、生利先生が子供たちと遊ぶ道具をたくさん用意して下さいました。お蔭で、よく走り回り、小物を造り、水鉄砲やシャボン玉で楽しめました。トイレ、ゴミ担当もこの場所に来られた方々が気持ちよく過ごして頂きたいという思いでしました。常に気を配っていたのでお客さんには気持ちは伝わったと思います。

心に残ったもう1つの事は、身をもって2011年3月11日の津波を体験された語り部さん、尺八奏者の大久保さんの貴重な体験談です。大久保さんは、車のバックミラー越しに家がフワッと持ち上がり、自分のすぐ後ろに津波が押し寄せて来ていて、間一髪の判断で助かった話をされました。津波は第一波が到達し、引いては次の第2波がきて、また引いては次の波・・・と続きました。家の中にいた人、屋根に居た人、ベランダにいた人・・・、どうなったか判らないそうです。

大久保さんは、やっとの思いで高台の城山体育館に避難、その間も地震は何度も起きました。夜はあちこちで火の手が上がりました。海面に浮かぶ壊れた家屋に火がついているのもたくさん見えたそうです。体育館には約700人が避難していましたが、とても寒く、敷いていたブルーシートをかぶって寒さを凌ぎました。3・11当日、大久保さんのお父様が歯医者に行ってる間に被災、同年6月に採取したDNA鑑定の結果を、9月に知り、本人と判明しました。遺体は腰から下一部と片手のみ、手に時計をはめていたのが決め手となりました。一つの遺体に数人の家族が名乗り出ることもあったそうです。

大久保さんは、後方から山が動くような津波から襲ってきて、走って走って逃げました。その感覚がまだ残っています。そして、何百とある遺体からお父さんを探したことが忘れられないそうです。遺体は外にあったものを安置所内に持ってきて置くだけ。泥だらけの遺体。1枚ずつ毛布をはがし

て父親の遺体を探す。気持ちが高揚していて、何も感じなかったそうです。大槌町役場では職員40名が亡くなっています。その中には友達もいました。「何故お前はここにいるんだと！」・・・人が一瞬にして亡くなる。「死んだ」と言う人はいない。「流された」「持って行かれた」と言う。重く、深い思い入れがあるのでしょうか。生涯忘れられない経験を淡々と話されてました。重たいものを背負って生きておられます。大久保さんのお話は、何度聞いても胸が締め付けられる思いです。神様に祈らずにはられません。

山口天使幼稚園 教諭

8月5日から10日まで岩手県大槌町にボランティアに行かせて頂きました。天使幼稚園では毎年、先輩の先生方がボランティアに参加されていて、被災地についての話を聞く機会が多くあり、子ども達もよくお祈りしていました。話を聞いているうちに実際に現地に行ってみたく、という気持ちが強くなり、今年初めて東北に行かせて頂きました。現地で見たり聞いたことは私が思っていたことと違う事も多く、とても勉強になりました。

視察の時のガイドの方の話がとても印象的でした。「この感情は実際に体験した人じゃないと分からない」という言葉が一番心に刺さりました。確かに、どんなに現地を見ても話を聞いても私自身は地震も津波も体験していません。この視察は、今後被災地や被災されている方々のために、どう動くべきなのか考えるきっかけになりました。大槌町は復興に向かってどんどん進んでいます。町にはたくさんの工事車両が出入りしており、新しい建物も建設されています。ですが、6年半かかってまだ更地のままだったり、仮設住宅に住まれている方もいらっしゃいます。現状を目にした時、まずは現地の方の話を聞き、知ることが大切だと思いました。聞いたことや感じたことを正しく伝えていくこともボランティアの1つだと思いました。

ボランティアの初日に、大槌町の海で行われた「おおつちありがとうロックフェスティバル」というイベントに参加しました。そこでは子ども達と一緒に工作や水鉄砲やシャボン玉で遊びました。その際に、一人の年配の女性の方が「私もシャボン玉をさせてもらっていいですか？」と来られて、子ども達と一緒に楽しませていました。帰り際に「とても楽しい時間を過ごさせてもらいました、ありがとう。ボランティアの方にはいつもお世話になっています。」と笑顔で言ってくださいました。子ども達だけが対象だと考えていましたが、大人の方にとっても息抜きや交流の時間を提供することができ、とても嬉しかったです。活動することに対して不安が少しありましたが、私自身も楽しい時間を過ごさせてもらいました。

このボランティアの中で、岩手県の方々、スタッフの方、一緒に過ごしたボランティアのメンバーなどたくさんのお出会いがありました。お互いに協力し、支え合って過ごすことの大切さを改めて実感しました。今、東北の方々も頑張って復興に向けて進んでいますが、まだまだ皆で助け合って乗り越えなければいけない課題もあります。私たちも被災された方々に寄り添って一緒に頑張っていけるように、被災地の現状や被災された方々の話を、周りの人たちや子ども達にもしっかりと伝え、一緒に考えていきたいと思いました。

この度はこのような貴重な機会を与えて頂き、本当にありがとうございました。

高円寺教会信徒

3月の福島・南相馬に続き、今回は岩手県大槌町のボランティアに参加させていただきました。私

にとって2回目の東日本大震災の被災地訪問です。福島とは違う被災地の様子を、実際に行くことによってまた何かを肌で感じてこようと出かけました。

東京をお昼の新幹線に乗って大槌に着いたのは、午後6時過ぎ。山口県からいらしてるほかの方は12時間以上かかっていたの到着、それだけで、頭が下がる思いがしました。

一日目の活動は、大槌で開かれる地元の人たちの野外ロックフェスティバルの会場係のお手伝い。ゴミ拾い、トイレ掃除、またロックフェスに来た子供たちを遊ばせるブースのちょっとしたお手伝いをしました。東京のロックフェスティバルを想像していたら、日曜日なのに時間になっても人はまばら。「一体なぜ？」と思ったら、それは地元若い人がいないといった現実でした。子供ブースに来た子と話をしたら、40代と思われるお父さんがロックの演奏をするというので、フェスに来た、と。そこで私達も、おばさん数人で彼のお父さんの演奏を応援しに聞きにいきました。ステージの近くも人はまばら。ロックも何故か物悲しく感じ、辛い経験を乗り越えて今があるように感じました。後で聞いたら、毎年このフェスが開かれる事が、皆の喜びだとか……。その思いが伝わって来ました。子供のお母さんと話をしたら「演奏を聞きに来てありがとうございます」と……。また、会場係のちょっとした仕事にもお礼を言われ、大したことをしていないのに来ただけで有難く思ってしまうことに感謝でした。福島の時も同じでした。

二日目の午前中は、地元の震災ボランティアの語り部さんの案内で、津波で全壊した町のいろいろなところを見せてもらい、お話を伺いました。語り部さんが実際に、避難し助かった所に行きました。津波が押し寄せるなか、さぞ恐ろしかったであろうと思いましたが、一緒に逃げたお年寄りが、最後の急な坂のところで、その坂のきつさゆえに、前回の津波はここまでこなかったと言って避難せず、そこにとどまり亡くなったという話を聞きました。何とも悲しい実体験で、それ故に、町内会長をされてた語り部さんは、高い防波堤を作るより、まずお年寄りが避難しやすい経路の整備をと、行政に訴えたが聞き入れられず、それが無念だとおっしゃっていました。どんなに、高い防波堤を作ったところで、毎回想定外の津波が来るので、逃げるしか身を守る方法はないと。その言葉が耳に残りました。また、町役場の職員が多く亡くなったのも大きな痛手で、津波を経験していない外から来た行政の人のやり方で復興が進められ、地元の人々の声が反映されず、地元の人々が大切にしていたもの（湧き水、町から海が見える景観）も失われていったと。復興が進んでいるとは言え、辛い現実を知りました。

実質2日間の私の主なボランティアとしての活動は、一緒に来た皆さんの20名分の夕食作り。ただの主婦としては、それしかできなかつたのですが、ボランティアの活動にきて、「美味しい食事ができるのがうれしい」と言って下さったのが有難かったです。昼間の活動で、幼稚園の先生、学校の先生、学生さん、教会の方、神学生さん、皆さん一人一人が指示されるわけでもないのに、持てる力を発揮して活動しているのが印象的で、互いを認め合っている空気がとても心地よかったです。これも先頭に立って引っ張ってくださっている柴田神父様がいらっしゃればこそだと思いました。

3日目の夜、釜石の震災直後の数日を描いた映画、DVD、「遺体 明日への10日間」を神父様が見せて下さいました。あまりにも過酷な現実があった事を、映画によって深く理解しました。休校になった学校の体育館に運び込まれるたくさんの遺体、一人一人に家族がいて歴史があって、そ

の遺体を丁寧に見送る仕事をする主人公。見終わってその悲惨さに圧倒されしばらく皆、声も出ませんでした。ぜひ多くの方に見てほしいと思いました。

四日目、一足お先に帰路につきましたが、釜石まで車で送ってくださったカリタス大槌の方と、帰り際お話をしたら、福島復興はこれからだと、被災した地域同士で、互いを思いやる言葉に温かいものを感じました。

前回の福島のボランティアと同じく、たいした仕事も出来なかったのですが、とにかく被災地にまた行って良かったと、思いました。ちょっとしたことでも、人それぞれ感じることは違います。

だからこそ多くの方が被災地を訪ねて、多くのことを肌で感じて、そして、それぞれの場で感じた事を、語っていく、それが大事なことはないかと今回は強く感じました。そうゆう意味からも、いつも私たちにこういう機会を作ってくださっている、柴田神父様、また、お世話をして下さっている、山口教会の瀬川さんご夫妻に心から感謝申し上げます。

これからもずっと、「被災地、頑張れー」と祈り続けます。

高円寺教会信徒

私は被災地ボランティアに初めて参加いたしました。「おおつちありがとうロックフェスティバル」で子どもたちのブースを作って遊ぶだけでなく会場のごみの片付けや仮設トイレの掃除などもしました。ひとりの女性が「仮設トイレを掃除しているのすごいですね。常設トイレを掃除しているのは見かけますが」と話されました。お褒めの言葉をかけて下さったので驚きましたが、大変嬉しかったです。

今回のフェスのテーマは「the OVER 感動を超える」だそうです。会場で食べて飲んで、フェスティバルに来た人と話をして、ロックバンドの曲に合わせて手や身体をいっぱい振って、私たちも復興を応援していることアピールしてきました。

そして、語り部さんの話を伺えました。自然の驚異は予測できないので危機管理をもつことが大切だと学びました。現地で、現状を見ながら被災当時のお話を聞くことができ、貴重な経験になりました。

高円寺教会信徒

初めてのボランティア参加で、不安もありましたが、神父様はじめ、現地のスタッフ・山口教会のみなさん、幼稚園の皆さん、萩光塩の学生さん、皆さんによくいただきました。

「ありがとうおおつちロックフェスティバル」では、こどもブースの設営や会場のごみ箱の巡回点検、仮設トイレと手洗いの掃除・管理を行いながら、合間にロック演奏を見て楽しみました。

大槌ベースでは、数日、皆さんの晩ご飯作りをしました。約 20 人分の食事を用意するのは初めてでした。今後、災害時の炊き出しがあった時にも、この経験は活かさそうです。

印象に残ったのは、晩に観た DVD『遺体明日への 10 間』です。「彼らには、悲しむ時間さえなかった」とキャプションにありました。多くの釜石市民が未曾有の津波に襲われ、廃校になった体育館に次々に「死体」が運ばれてきました。その「死体」を「ご遺体」として扱おうとする体験が描かれていました。死者の尊厳を取り戻すことで、生き残った者が無念さと罪の意識を慰謝していた、ことを痛感しました。

また、大槌の津波の語り部さんは、被災した場所や、津波から逃げて登った山寺を案内してくだ

さいました。直に、体験を聞いたことは貴重な体験でした。特に、かつての市街地のジオラマ模型に胸を衝かれました。一戸一戸の家の模型に、住人の名札がありました。公園には「桜がきれいだった」「湧き水が湧いていた」と説明がありました。今はもう、なくなってしまった公園の記憶を留めておきたい願いと祈りが伝わってきました。

私は、東京在住なので、自分が生きている間に首都直下型地震を体験する可能性があります。そのため、何気ない風景に心動かされる時に「この風景は次の震災で失われるかもしれない」という予感のうちに見ることがあります。だから、携帯で頻繁に写真を撮って、ツイッターなどにアップしています。

被災地のことも他人事ではなく、今後自分が当事者になることとして、見聞きしています。その意味でも、こうしたボランティアを企画された柴田神父様ほかスタッフの皆さんに心からお礼と感謝を申し上げます。ありがとうございました。

イエズス会 神学生（東京在住）

初めて岩手県大槌町へボランティアに行って楽しかったです。長い間、日本語を勉強した後、他の活動に参加したい、また、自分の心を開きたいと思っていました。大槌ベースに五泊六日いましたが、体調が悪く活動が上手くできませんでした。しかし、頑張れたと思います。大槌町にいる間いろいろな所に連れて行ってもらいました。その中で出会った人から話を聞くことができました。そして、現地の人々が街の復興のために一緒に頑張っている姿を素晴らしいと思いました。その姿を通して、津波によって亡くなられた人々から、今生きている人々、そして次の時代を生きる人々へと、強く命が受け継がれていくことを感じました。